

近畿圏の目指す姿(案)

「近畿圏広域地方計画」に係る国の地方行政機関、府県・市町村、経済団体などの全ての主体は、市民とともに総力を結集し、以下のような近畿圏を目指すこととする。

1. 歴史・文化に誇りとこだわりを持って本物を産み育む圏域

【現状・背景】

関西は、古くから都が置かれ、長い年月をかけて多様な文化を創造・継承・蓄積し、多くの歴史・文化資産を有するだけでなく、多様性と厚みを兼ね備えた細やかな伝統工芸、生活、食、風土、眺めなどを有している。

【目指す姿】

長い年月をかけて多様な文化を創造・継承・蓄積してきた関西が、日本のアイデンティティの象徴圏域となる。

これら本物の日本固有の歴史・文化資産や景観を大切に保全・継承し、本物にこだわる伝統を踏まえ、まちづくり、ものづくり、ひとづくりにおいても徹底して質にこだわり、新たな本物(「関西ブランド」「日本ブランド」)を創造・展開する圏域となる。

隣接する地域も含め関西各地に残る固有資源(伝統・文化・風景など)を核として個性あふれる地域づくりを行い、世界に誇れる歴史・文化圏域となる。

2. 首都圏とは異なる多様な価値が集積する日本のもう一つの中心核

【現状・背景】

関西は、古くから日本の発展を牽引し、現在でも個性の異なる都市が競争しつつ、人口、経済力、情報、知的財産などにおいて相当規模の集積を有し、開かれた圏域として周辺圏域に大きな影響を与えている。

【目指す姿】

これら近畿圏が持つ高度かつ多様な基礎ポテンシャルをシームレスに繋ぐとともに、他圏域との連携を強化することで、多彩な文化、暮らし、産業が息づき、生活の豊かさが実現された首都圏とは異なるもう一つの中心核となる。

多様で厚みのある文化の集積を活かして、我が国における「文化首都」としての役割を担う圏域となる。

非常時には首都圏のバックアップを担う圏域となる。

3. アジアをリードする世界に冠たる創造・交流拠点

【現状・背景】

関西は、世界有数の家電関連産業、医薬品等のバイオ産業や多様で層の厚いものづくり基盤技術を有する企業や世界最高水準の大学・研究機関の集積に加え、完全24時間運用が可能な関西国際空港やスーパー中核港湾である阪神港なども備えており、次世代産業を発展させる高いポテンシャルを有している。また、歴史的にアジアとの繋がりが強く、盛んに交流も行われている。

【目指す姿】

京阪神都市圏が関西と周辺地域の人・モノ・情報・経済を牽引するとともに、関西のエンジン産業として次世代産業やクリエイティブ産業を位置付け、これにより多様で層の厚いものづくり基盤技術を有する企業をはじめ近畿圏の産業全体を牽引する圏域となる。

国際競争を視野に入れた次世代産業などを展開するため、陸・海・空の人流・物流の総合交通ネットワークが確立されたアジア・ゲートウェイを担う圏域となる。

質の高い人材を育成・創出するとともに、アジアをはじめ世界の優秀な人材が関西を拠点に密度の高い交流を展開することにより、他圏域にない独創性豊かなイノベーションを生み出す圏域となる。

4. 人と自然が共生する持続可能な世界的環境先進圏域

【現状・背景】

関西は、琵琶湖における水環境対策に古くから取り組んでおり、また、地球温暖化防止京都会議や世界水フォーラムの実施、コウノトリとの共生などの環境面での先進的な取り組みが行われている。

【目指す姿】

豊かな自然環境の保全・再生や地球温暖化防止などの環境対策を近畿圏全体でマネジメントすることなどにより、環境先進圏域を目指すとともに、環境関連の産業・研究機関の集積を活かし、地球環境問題の解決に向け、世界に貢献する圏域となる。

流域圏を一体として捉え、水循環の管理体制を構築するとともに、近畿圏全体での廃棄物リサイクルなどを行うことなどにより、循環型社会を実現する圏域となる。

5. 都市的魅力と自然的魅力を日常的に享受できる圏域

【現状・背景】

関西は、独自の地形(平野・盆地、山地の細かい地形が海と琵琶湖の間で連続した構造)のもとに都市・農山漁村・自然が適度に分散し、都市的魅力と自然的魅力の双方を同時に享受できる恵まれた条件を有している。

【目指す姿】

都市と自然との近接性を活かし、二地域居住や一つの地域に住んでいても両方の魅力が味わえる住まい方など、多様なライフスタイルが選択できる圏域となる。

大都市部は、それぞれの都市が持つ個性を活かしながら、国際ビジネス機能や高次の生産消費機能、都心居住機能などを発揮し、近畿圏や周辺地域をリードする圏域となる。

地方部では、中心的な都市を核として周辺の地域と連携することにより、持続的に発展する広域的な生活圏を形成する。

農山漁村では、農林水産業のもつ食料の安定供給の役割をはじめとする多面的機能を十分に発揮させるための適切な整備と保全を図り、その上で、都市との共生・対流や地域資源を活用した産業の活性化などにより持続可能な地域社会を形成する。

6. 人々が自律して快適で豊かに暮らせる高福祉圏域

【現状・背景】

三大都市圏の中でも、近畿圏は人口減少と高齢化が早期に進行しており、そのスピードも圏域内の各地域により差がある。

【目指す姿】

各地域が広域的な連携を図ることにより、近畿圏のどこに住んでも医療・教育・交通などの基本的な生活サービス機能を享受できる圏域となる。

地域コミュニティの再生により、子育てなどの面で多様な主体が地域全体で社会を構築する圏域となる。

ユニバーサルデザインの考え方にに基づき、高齢者、障害者など多様な人々が自由に社会に参画し、生き生きと暮らせる圏域となる。

7.暮らし・産業を支える災害に強い安全・安心圏域

【現状・背景】

関西は、阪神・淡路大震災などの経験・教訓に伴う高い防災意識や防災関連の研究機関などの集積を有する一方、東南海・南海地震による大規模被災やゼロメートル地帯における水害に対する脆弱性や地理的に近接する大都市の同時被災による都市機能の麻痺が懸念されている。

【目指す姿】

東南海・南海地震などの大規模地震・津波、豪雨・豪雪・高潮などの自然災害に強く、安心して生活し産業活動ができる圏域となる。

過去の災害の経験を活かし、防災・減災分野における研究・教育と実務を兼ね備えた、国内及びアジア・太平洋地域に貢献する国際防災拠点となる。